

## 『フランス物語』 試論

——リヨンのトラブルを背景とした物語の成立について——

赤 瀬 雅 子

『フランス物語』は周知のように、フランスから、永井荷風が巖谷小波の許に送り続けた短編の集成である。

永井荷風がフランスに滞在したのは1907年7月から翌1908年5月末までの10ヶ月である。このうち荷風がリヨンで過ごしたのは、この滞在の大半の期間を占める9ヶ月である。このため、『フランス物語』の大半は、リヨンを背景にした短編であると思いきや、読んでいる読者も多い。『フランス物語』が出版されるや否や発禁処分に付されたことは周知のことであるのに、その背景は意外に知られていない。

「舟と車」から「巴里のわかれ」までの十二編を、実際にフランス物語というにふさわしい実体を備えた短編と捉えた時、リヨンを背景とした物語は、第二編の「ローン河のほとり」から第七編の「霧の夜」までの六編に過ぎない。

また独立した覚え書きのような体裁を持つ「橡の落葉」の小章八編のうちでも、リヨンを扱ったものは二編である。

荷風は1903年10月から1907年7月まで、アメリカに滞在した間には、常にフランスに行くことを思っていた。またフランスに渡ってからはリヨンに滞在しながら、常にパリに行くことを思っていたのである。

若い作家の見果てぬ夢が、『あめりか物語』と『フランス物語』を書かせ

たともいえよう。

父永井禾原の配慮によって、フランスに渡れたことは、大きな喜びではあったが、リオンは荷風が憧れた約束の土地ではなかった。

リオンをフランス第二の都市として、あるいは絹織物の盛んな産業都市として規定するだけでは不十分である。歴史の爪痕もまだ生々しく残るこの古都の魅力を、若い荷風が捉えたことは、そこがはじめ憧憬した地ではなかったが故にできたことでもあったといえよう。

夾雑物を取り除いてゆくと、リオンを背景とした『ふらんす物語』の上質の部分はごく限られる。しかしこの中に、後の『濃東綺譚』にまで続く、荷風作品の核が潜んでいるといえる。そこを多少とも捉えてみたい。

筆者はいくつかの小論の中でパリのパッサージュについて論じた。そして荷風も垣間見たであろうことはほぼ確実な、パリのパッサージュの面影が作品に糸を引いていることを実証できたかと思っている。

しかし荷風はそれ以前に、リオン独特の、パリのパッサージュにも比肩するトラブール (Traboule) に出会っていたのである。

ラテン語の *transambulare* を分析すると、*trans* はフランス語の *à travers* に当たり、*ambulare* は *aller, se promener* に当たる。

*trabouler* という動詞が辞典リトレに掲載されたのは1894年のことである。それは「家屋と家屋との間に道をつける」という意味であった。これは書き言葉ではなく、話し言葉である。

今日では女性名詞としての *traboule* が一般に使われている。設えられた小路の意味である。

十九紀末までこの名詞は辞典には存在していない。そして二十世紀初頭、遅ればせながらこの言葉が流布したのであった。

リオンのトラブールには、今は廃れたとはいうものの装いを凝らした商店が建ち並ぶパリのパッサージュの華やかさはない。

唯、人の住む建物が、小路を隔てて立ち並ぶ。南欧を思わせる建造物の中で最も重要な部分であるバルコンは凝った装飾を持つだけでなく、意外な角

度に突き出されている。数十メートルは続くこのトラブルは、光線の具合によっては幻想的とも見える屋根によって覆われていて、バルコンを仰ぎ見る人々を誘う。

パリのパッサージュがカフェやレストラン同様、直接的に人を誘う空間であるのに対して、トラブルはリヨンの人々と同じく、自然体である。ただし光線もほの暗く、一度誘い込まれば、パッサージュよりも強い魅力をもつといえるかもしれない。

『ふらんす物語』第三編の「秋のちまた」の舞台は明らかにリヨンであり、このような述懐が記される。

ミュッセを生んだフランスにゲーテは現れず、ベルリオを生んだフランスにワグネルは出ない。北欧の森の暗さは神秘を語るであらうが、然し南の方優しいフランスの自然がかもす悲哀の中には云ひがたい美が含まれて居るので、人は其の悲哀によつて何物かを思ひ何者かを悟ると云ふよりは、直ちに悲哀と云ふ其の美に酔うて恍惚として了ふのである。

リヨンの自然にフランスの本質を見た荷風は本人の意識とはうらはらに、パリにあるよりも明らかに幸福であったといえよう。しかし題名にあるとおりの秋にあっては、トラブルに逃げ込んだ異邦人は、またここにもいたたまれず、大通りへと戻り、諦めて家路につく。

かう云ふ裏街、車や馬の危険のない裏町ばかりを彷徨ふ盲目の音楽者が、何処からともなく歩み出て、音のわるいヴィヨロンの調に、暮れ行く四辺の淋しさに又一層の哀れを添えしめる……。

自分は何時でも有合ふ小銭を、衣囊から掴み出して投捨ててやるが否や、急いで明い大通りへ駆出すのだ。早く黄昏が過去つて燈火の輝く夜になつて呉ればよいと、そればかり思詰めて家へ帰るのである。寧ろ夜になつたならば薄暗い夕方よりも幾分か気が変わるであらう。晚餐に葡萄酒でも飲

んだら、少しは心が浮き立つであらうと思ふからで。

然し、連日の秋雨に腐り果てた心は夜が来やうとも、酒に酔はうとも、如何して浮き立つ力があらう。狭い室の机の上の燈火は幾程心を拵り出し、ても妙に薄暗く見えるし、酔つた心は却つて思はずとももの事ばかりを思ひ返す。

荷風と重なる主人公は、トラブルからいわば這い出して大通りにぶつかり、ほっとしたのにも関わらず、またアパルトマンの中で、あの薄暗いトラブルの空間を思うのである。

鼠色した古い壁塗の人家は雨に濡れたまま、灰色の空の下に蹲踞つて居て、其の窓窓は盲人の眼のやうに、何の活気も何の人氣もない。かう云ふ横町には嘗てお客の這入つた事のない様な荒物屋だの古時計屋なぞ云ふ小店があるが、其の真暗な燈を点さぬ店の中には必ずリューマチスで手の動かぬ様な老婆がチョココンと張番をして居る。

こんな風景もまた、トラブル付近の風景である。あくまでも暗くあるべきであるのに、しかし不思議な淡い光線がどこからともなく入ってくる。余談ながらパリのフォーラム・デ・アルの何階かの地階や、現在のルーヴル宮殿の地階の入り口に見られる不可思議な光線の魔術は、トラブルのそれと酷似している。

「かう云ふ晩である——バルコンに滴る雨の音がわけもなく人を泣かせるのは。ヴェルレーンの詩に」と述べ、「あきのうた」の原詩を挙げ、訳というよりも「と云ふやうな意味が歌はれてある」として、自在な調べの、荷風独特の散文風な訳を試みている。この訳詩をつぶさに読み、あるいは朗唱した後は、「わけもなく人を泣かせる」「バルコンに滴る雨の音」は少なくとも荷風の中では、トラブルのバルコンであることが納得できる。パリのパッサージュの魅力が歩廊の堅牢な美であるのに対して、リヨンのトラブルの

魅力は目線の上に重なるバルコンである。バルコンは何層にも、波濤のように重なっている。

荷風訳はつぎのようなものである。

「巷に雨のそそぐが如く、わが心にも雨が降る。如何なれば、かかる悲みのわが心の中には進入りし。地に響き屋根に音する蕭条なる雨の音よ。わが心は何が故に憂ふるとも知らず、唯だ訳もなく潤ふ。訳もなく悲しむ悲しみこそ、悲しみの極みと云ふのであらう。憎むでもなく、愛するでもなくて、わが心には無量の悲しみが宿る……」

後の『珊瑚集』にも繋がる、ポール・ヴェルレーヌの詩に対する荷風独特の、いわば韻律の無い、しかし捨てがたい味わいのある訳詩を誕生させたのは、リヨンのトラブルがもたらした靈感である。

『ふらんす物語』第七編の「霧の夜」を以て、事実上、リオンを背景とした部分は終わる。あとは「橡の落葉」の中にリオンを背景とした部分が散見されるだけである。

第六編の「祭の夜がたり」をみよう。

リヨンの街の東南部、ソーヌ河の畔のフルピエールの山に聳える聖母マリアの大バジリック（伽藍）で、12月7日、毎年、祭典がある。16世紀のペスト大流行のおり、リヨンの街のみは、聖母のお蔭で疫病の猖獗を免れた由で、感謝のための祭典である。

大バジリックには燈火でDIEU PROTEGE LA FRANCEという文字が書かれ、其の下にあるサン・ジャン教会にもMERCY SAINTE VIERGEの文字が夜空に浮かぶ。

「夜がたり」の語り手と聞き手の若い男二人は、「新しい時代の非常な利己主義の人間で、同時に皮肉な弱い厭世家」である。彼等はこの祭りでにぎわうベルクール広場で出会い、リオン一の料理屋の金粉楼で語り合う。

「君はリヨンに居たのか。」自分は稍驚いた。一ヶ月ほど前丁度百聖祭と云ふ祭日の頃に出会った時、彼はフランス人がコート・ダジュール（藍色の海辺）と云つて居る景色も気候も此の上ない程麗しい南部地中海辺を旅行しようと云つて居たからで。

「旅行はどうした。お廃止か。」

「まづお廃止も同様さ。途中でひどい目に会つて折角の計画も滅茶滅茶になつてしまつた。又来年、休暇と金が出来るまではリヨンの霧の中に蟄居する訳さ。」

語り手の男はフランスに足を踏み入れたその日から、この国の魅力の虜にはなるまいと固く決心をしていたのに、とうとうやられてしまったそうである。

この決心を貫くには、人間に近づくのは危険なので、フランスの山水に酔おうと思った男は、地中海の方への旅を企てる。男はマルセイユからサンラファエル、カーン、ニース、マントン、モンテカルロと巡ることにする。

男の巧まざる滑稽さ加減が可笑しい。この巡回はもっとも官能に訴える旅の順路の定番である。近代の小説の、情念の悲劇といった主題のなかにもたびたび出てくる都市の名が連ねられているではないか。

ここで荷風は筆の矛先を転換させてしまう。モンテカルロで事件があったとしても、それはあまりにも定番に過ぎる。

男は汽車に乗り合わせた、年老いたリセの先生と話す。先生にアビニオンを見るようにと勧められた男はその気になり、アビニオンに行く。ここはパリやリヨンに比べれば、南国である。横町を辿れば、ギタアルの調べが聞こえてくる。

其の音をたよつて横町から横町、小路から小路を迷つて行く中、調はふつと途絶えてしまつた。茫然として自分は夢から覚めた如く佇むと、其の時突当りの唯ある二階のバルコンに、ぼんやり灯のついて居るのを認めた。

またしてもバルコンである。アビニオンの、南国の貌を持つバルコンである。しかし、アビニオンの情景を描写しながらも、そのバルコンは暗く、翳っている。その証拠には、荷風はここでボードレールを想うのである。

自分はどうしても、あの窓の中を覗きたい。窓の中に這入りたい。どんな危険をもちとはないと思つた。好奇心ほど恐いものはないよ。(中略)

自分は最少し思慮深く慎んで居たなら、この云ふに云はれぬ静かな艶かしい南国の秋の夜に、イタリヤのオペラの舞台でなければ、吾々北の人間は決して見る事の出来ぬ美しい美しい忍会ひの場を目撃したかも知れぬものを。若い男はロメオのやうに左程に高くはないバルコンの欄干に攀登つたであらう。

荷風がこのようにアビニオンにふさわしい想像力を働かしてみても、このバルコンはリヨンのトラブールのそれである。

パリのパッサージュのようにきらびやかではないのに人を捕らえて離さないトラブールは、リヨンの旧市街に今もひっそりと存在する。

荷風は「椿姫」もどきにシャンゼリゼの辺りに馬車を駆るパリの浮かれ女や、カルティエ・ラタンの書生の友達のような女達を、『ふらんす物語』の中や、この物語の周辺で描き続ける。

しかし「祭りの夜がたり」の語り手の若い男を虜にしたのは、テキストの表面に顕れたところではアビニオンの小路のバルコンの女である。そして筆者には、荷風に靈感を与えた女のいるバルコンとは、リヨンのトラブールのバルコンであると思われるのである。

『ふらんす物語』の中で實際上、リヨン最後の舞台となる第七編「霧の夜」を見よう。荷風が実際に体験したパンシオンの大晦日の有様、ミュージックホールの有様などは、序章に過ぎない。リヨンの冬の「霧の夜」に小路に現れる女のための前置きである。

ここにはバルコンはないが、小路がある。

仏蘭西の街は米国とは違って不規則な小路やどこへ通するとも知らぬ抜裏が多い。忽ち自分は暗い霧の中を唯ある小路に迷入った。やつと荷車が通れる位な道幅で、両側に立つて居る低い石作りの家屋は汚れた黒赤い瓦屋根の半ば傾き、扉の落ちた窓の数は少く、土塗の壁の憂鬱な事はまるで牢獄のやう。

これはトラブルではない。辞典のトラブルの定義に居心地のよしあしを書いてあるわけではないが、トラブルには一種の快さがなければならない。

トラブルも社会的な認知をうながし、手入れをしなければ、早晚このような運命に見舞われかねないものである。

それにしても荷風は後年の傑作、『日和下駄』に到るまで、何故裏道のみ歩もうとするのであろうか。荷風がフランスに馴染んだことの結果から云えば、簡単に類推できる。フランス人の日常の散策はあまり大通りでは行われぬ。19世紀末のムードの、シャンゼリゼを馬車で散策するというのは例外に属する。ブルヴァール(環状道路)はかつては小屋掛けの見せ物を楽しむ通りであり、現在では自動車の疾走する通りである。アヴニュー(並木路)は広くても快いが、限られている。

狭く、ひっそりと静まりかえる住宅や、時には小さな目立たない店が見受けられるようなリュウ(街路)が散策には適しているとはフランス人の誰しもが、極めて自然に思うところである。荷風は散策には適さない暗く汚れた、トラブルでは決してないがトラブルの魅力の一部は確実に持っている、隔離された空間を探すのである。街路の描写はこう続く。

底の厚い靴を穿きながらも歩けば忽ち足の裏が痛くなる程凸凹した敷石の処処の凹みには、えたいの知れぬ汚水が溜まつていて、何処から来ると



も知れず、何の光とも知れぬ光を受けて其の面は気味わるく光つて居る。

シャルル・ボードレーを耽読していた当時の荷風は、ここでもボードレーを思う。

荷風晩年の最高傑作『溼東綺譚』について述べるにしても、物語の二重構造や格調高く述べられている「作後贅言」はここではおく。毎晩山の手の家を抜け出して路地から路地を歩む有様には、フランスで荷風が得、身に付けた散策の趣味が確実に生きている。

南欧では、黄昏時、土地の人という人が散歩をする。かつて女性は必ず父、夫、兄等の介添え無しには散歩できなかつた。荷風は敢えて一人で散策する女性の上に想像力を働かせた。異邦人の荷風がフランス人以上に横町やトラヴァールにこだわるのは当然であろう。今吾々は荷風が生涯こだわった路地にトラブールの投影を見ざるを得ないのである。

『日和下駄』の第七は、題名も直裁に「路地」である。「路地」はつぎのようにはじまっている。

鉄道と渡船との比較からここに思起されるのは立派な表通の街路に対してその間間に隠れている路地の興味である。擬造西洋館の商店並び立つ表通は丁度電車の往来する鉄橋の趣に等しい。それに反して日陰の薄暗い路地はあたかも渡船の物哀にして情趣の深きに似ている。式亭三馬が戯作『浮世床』の挿絵に歌川国直が路地口のさまを描いた図がある。歌川豊国はその時代のあらゆる階級の女の風俗を描いた絵本『時勢粧』の中に路地の有様を写している。路地はそれらの浮世絵に見る如く今も昔も変わりなく細民の棲する処、日の当つた表通からは見る事の出来ない種々なる生活が潜みかくれている。侘住居の果敢さもある。隠棲の平和もある。失敗と挫折と窮迫との最終の報酬なる怠惰と無責任との楽境もある。すいた同志の新世帯もあれば命掛けなる密通の冒険もある。されば路地は細く短しといえども趣味と変化に富むことあたかも長編の小説の如しといわれるである

う。

若い日、トラブールとパッサージュにあれほどこだわった荷風の関心は、ボードレールと同様、そこに凝縮された人間の営みをみることにあった。荷風こそ真に都市の作家といえる作家である。

「路地」の中の路地の描写で、次に挙げる部分こそ、西欧の絵画あるいは演劇あるいは文学作品の洗礼なしには語れない。そして荷風の若い日のリヨンのトラブールとパリのパッサージュへの関心が、作家として成熟した後の荷風にこのような表現をさせたのである。ここにある日本の情景は、フランスの思想・フランスの文学の影響下にある、荷風独特の世界である。

路地の光景が常に私をしてかくの如く興味を催さしむるは西洋銅版画に見るが如きあるいはわが浮世絵に味うが如き平民的画趣ともいうべき一種の芸術的感興に基くものである。(中略)

殊に表通りの向側に日の光が照渡つている時などは風になびく柳の枝や広告の旗の間に、往来の人の形が影の如く現れては消えて行く有様、丁度燈火に照された演劇の舞台を見るような思いがする。夜になつて此方は真暗な路地裏から表通の燈火を見るが如きはいわずともまた別様の興趣がある。川添いの町の路地は折々忍返しをつけたその出口から遙に河岸通りのみならず、併せて橋の欄干や過行く荷船の帆の一部を望み得させる事がある。かくの如き光景はけだし逸品中の逸品である。

『溼東綺譚』において極めて重要な部分をなす路地の描写も、こうした路地の延長線上にある。

最後に荷風が目を付けたところは、フランス文化の影響の及びがたいところであった。東京の路は欧州の路と異なり、名前がついていない。否、名前のある路地もありはするものの、「その土地に住古したものの中にのみ通用されべき名前であつて、東京市の市政が認めて以て公の町名となしたものは

## 『フランス物語』試論

恐らくは一つもあるまい」というのが現状である。

「路地は公然市政によつて経営されたものではない。都市の面目体裁品格とは全然関係なき別天地である。」アナーキーさ加減も極まるというところに文学の自由と重なる思想を見るのを切望する向きからいえば、この点で、日本はフランスに勝る。荷風が学んだフランスは、極く少数の例外を除いて、路地には名前がつけられている。

若い日のトラブルへの関心を上手く潜在化してそれを暖めておき、『日和下駄』において顕在化させ、最後に『溼東綺譚』において最も効果的に東京の路地として登場させた荷風は、その技法においても並の作家ではない。